花咲かじじい

楠山正雄

一

むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがありました。

正直（しょうじき）な、人のいいおじいさんとおばあさんどうしでしたけれど、子どもがないので、飼犬（かいいぬ）の白（しろ）を、ほんとうの子どものようにかわいがっていました。白も、おじいさんとおばあさんに、それはよくなついていました。

すると、おとなりにも、おじいさんとおばあさんがありました。このほうは、いけない、欲（よく）ばりのおじい

さんとおばあさんでした。ですから、おとなりの白をにくらしがって、きたならしがって、いつもいじのわるいことばかりしていました。

ある日、正直おじいさんが、いつものようにくわをかついで、畑をほりかえしていますと、白も一緒につ
いてきて、そこらをくんくんかぎまわっていましたが、ふと、おじいさんのすそをくわえて、畑のすみの、大きなえのきの木の下までつれて行って、前足で土をかき立てながら、

「ここほれ、ワン、ワン。
ここほれ、ワン、ワン、ワン」

となきました。
「なんだな、なんだな」
と、おじいさんはいいながら、くわを入れてみますと、かちりと音がして、穴のそこできらきら光るものがありました。ずんずんほって行くと、小判(こばん)がたくさん、出てきました。おじいさんはびっくりして、大きな声でおばあさんをよびたてて、えんやら、えんやら、小判をうちのなかへはこび込みました。
正直(しょうじき)なおじいさんとおばあさんは、きゅうにお金持ちになりました。

二

すると、おとなりの欲(よく)ばりおじいさんが、それをきいてたいへんうらやましがって、さっそく白(しろ)をかりにきました。正直おじいさんは、人がいいものですから、うっかり白をかしてやりますと、欲ばりおじいさんは、いやがる白の首(くび)になわをつけて、ぐんぐん、畑のほうへひっぱって行きました。

「おれの畑にも小判がうまっているはずだ。さあ、どこだ、どこだ」

といいながら、よけいつよくひっぱりますと、白は苦しがって、やたらに、そこらの土をひっかきました。

欲（よく）ばりおじいさんは、

「うん、ここか。しめたぞ、しめたぞ」

といいながら、ほりはじめましたが、ほっても、ほっても出てくるものは、石ころやかわらのかけらばかりでした。それでもかまわず、やたらにほって行きますと、ぷんとくさいにおいがして、きたないものが、うじゃうじゃ、出てきました。欲ばりおじいさんは、「くさい」とさけんで、鼻（はな）をおさえました。そうして、腹立（はらだ）ちまぎれに、いきなりくわをふり上げて、白（しろ）のあ

たまから打ちおろしますと、かわいそうに、白はひと声（こえ）、「きゃん」とないたなり、死んでしまいました。

　正直（しょうじき）おじいさんとおばあさんは、あとでどんなにかなしがったでしょう。けれども死んでしまったものはしかたがありませんから、涙（なみだ）をこぼしながら、白の死骸（しがい）を引きとって、お庭のすみに穴をほって、ていねいにうずめてやって、お墓（はか）の代（かわ）りにちいさいまつの木を一本、その上にうえました。するとそのまつが、みるみるそだって行って、やがてりっぱな大木（たいぼく）になりました。

「これは白の形見（かたみ）だ」

こうおじいさんはいって、そのまつを切って、うすをこしらえました。そうして、

「白（しろ）はおもちがすきだったから」

といって、うすのなかにお米を入れて、おばあさんとふたりで、

「ぺんたらこっこ、ぺんたらこっこ」

と、つきはじめますと、ふしぎなことには、いくらついてもついても、あとからあとから、お米がふえて、みるみるうすにあふれて、そとにこぼれ出して、やがて、台所（だいどころ）いっぱいお米になってしまいました。

三

するとこんども、おとなりの欲（よく）ばりおじいさんとおばあさんがそれを知ってうらやましがって、またずうずうしくうすをかりにきました。人のいいおじいさんとおばあさんは、こんどもうっかりうすをかしてやりました。

うすをかりるとさっそく、欲ばりおじいさんは、うすのなかにお米を入れて、おばあさんをあいてに、

「ぺんたらこっこ、ぺんたらこっこ」

と、つきはじめましたが、どうしてお米がわき出すどころか、こんどもぷんといやなにおいがして、なかからうじゃうじゃ、きたないものが出てきて、うすにあふれて、そとにこぼれ出して、やがて、台所いっぱい、きたないものだらけになりました。

欲ばりおじいさんは、またかんしゃくをおこして、うすをたたきこわして、薪にしてもしてしまいました。

正直おじいさんは、うすを返してもらいに行きますと、灰になっていましたから、びっくりしました。でも、もしてしまったものはしかたがありませんから、がっかりしながら、ざるのなかに、のこった灰をかき

あつめて、しおしおうちへ帰りました。
「おばあさん、白のまつの木が、灰になってしまったよ」

こういっておじいさんは、お庭のすみの白のお墓のところまで、灰をかかえて行ってきますと、どこからか、すうすうぅあたたかい風が吹いてきて、ぱっと、灰をお庭いっぱいに吹きちらしました。するとどうでしょう、そこらに枯れ木のまま立っていたうめの木や、さくらの木が、灰をかぶると、みるみるそれが花になって、よそはまだ冬のさなかなのに、おじいさんのお庭ばかりは、すっかり春げしきになってしまいました。

おじいさんは、手をたたいてよろこびました。
「これはおもしろい。ついでに、いっそ、ほうぼうの木に花を咲かせてやりましょう」
そこで、おじいさんは、ざるにのこった灰をかかえて、
「花咲かじじい、花咲かじじい、日本一の花咲かじじい、枯れ木に花を咲かせましょう」
と、往来（おうらい）をよんであるきました。
すると、むこうから殿（との）さまが、馬にのって、おおぜい家来（けらい）をつれて、狩（かり）から帰ってきました。
殿さまは、おじいさんをよんで、

「ほう、めずらしいじじいだ。ではそこのさくらの枯れ木に、花を咲かせて見せよ」

といいつけました。おじいさんは、さっそくざるをかかえて、さくらの木に上がって、

「金のさくら、さらさら。

銀のさくら、さらさら」

といいながら、灰をつかんでふりまきますと、みるみる花が咲き出して、やがていちめん、さくらの花ざかりになりました。殿さまはびっくりして、

「これはみごとだ。これはふしぎだ」

といって、おじいさんをほめて、たくさんにごほうび

をくださいました。
　するとまた、おとなりの欲ばりおじいさんが、それをきいて、うらやましがって、のこっている灰をかきあつめてざるに入れて、正直おじいさんのまねをして、
「花咲かじじい、花咲かじじい、日本一の花咲かじじい、枯れ木に花を咲かせましょう」
と、往来をどなってあるきました。
　するとこんども、殿さまがとおりかかって、
「こないだの花咲かじじいがきたな。また花を咲かせて見せよ」
といいました。欲ばりおじいさんは、とくいらしい顔

をしながら、灰を入れたざるをかかえて、さくらの木に上がって、おなじように、

「金のさくら、さらさら。
銀のさくら、さらさら」

ととなえながら、やたらに灰をふりまきましたが、いっこうに花は咲きません。するうち、どっとひどい風が吹いてきて、灰は遠慮(えんりょ)なしに四方八方(しほうはっぽう)へ、ばらばら、ばらばらちって、殿さまやご家来(けらい)の目や鼻(はな)のなかへはいりました。そこでもここでも、目をこするやら、くしゃみをするやら、あたまの毛をはらうやら、たいへんなさわぎになりました。殿さまはたいそうお腹立(はらだ)ち

になって、
「にせものの花咲かじじいにちがいない。ふとどきなやつだ」
といって、欲ばりおじいさんを、しばらせてしまいました。おじいさんは、「ごめんなさい。ごめんなさい」といいましたが、とうとうろう屋へつれて行かれました。

底本：「むかし　むかし　あるところに」童話屋
１９９６（平成８）年６月24日初版発行
１９９６（平成８）年７月10日第２刷発行
底本の親本：「日本童話宝玉集（上中下版）」童話春秋
社
１９４８（昭和23）〜１９４９（昭和24）年発行
入力：鈴木厚司
校正：林　幸雄
ファイル作成：野口英司
２００１年12月19日公開
青空文庫作成ファイル：